

## [課題演習報告]

# すべての子供たちの学校適応を促進する教育活動の研究 ー子供に任せる活動を取り入れた学級経営を通してー

柳 井 文 陽

Fumiaki YANAI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース  
川崎町立川崎東小学校

(2021 年 1 月 4 日受理)

本研究は、「荒れ」た学校を立て直すことを目指し、「教師の指導すべきことを揃える活動」による規律ある生活づくりを基盤に、「子供に任せる活動」を中心とした学級活動(1)(以下、学活(1))を充実させた学級経営を行うことで、すべての子供たちの学校適応促進への影響を検討した。「教師の指導すべきことを揃える活動」は全学年で行い、「子供に任せる活動」を取り入れた学級経営を、昨年度特に「荒れ」が深刻だった第2・3・5学年において実施した。その結果、学校全体に落ち着きが見られたり、子供に任せる活動を実施した第2・3・5学年では「学級のよさ」について高い数値が見られたりした。他にも児童の感想などの質的な評価からも子供たちの学校適応が促進したことがわかる。このことから、「子供に任せる活動」としての学活(1)を充実させた学級経営を行うことは、すべての子供たちの学校適応促進に有効な手立てであることが示唆された。

キーワード：子供に任せる活動，学級経営，学校適応，荒れ，学級活動(1)

## 1 研究主題についての説明

### (1) 主題設定の理由

#### ア 在籍校の実態から

ここ 20 年来、学級崩壊やいじめ、不登校、小1プロブレム、中1ギャップなど、学級・学校に関わる社会問題の報道が後を絶たないが、在籍校においても授業が成立しないなどの状況が学校全体で見られた。(7月22日校内生徒指導委員会報告より)

在籍校は、通常学級在籍児童数 186 名、特別支援学級在籍児童数 9 名、計 195 名からなる。(令和2年度)在籍校の子供たちは、明るく元気で素直な反面、言動が粗野な子供も見られ学校が「荒れ」に向かう傾向にある。令和元年7月の校務運営委員会の報告によれば、以下(表1)のような課題が挙げられた。

校長の話によると、教師5人掛かりで暴れている児童を落ち着かせなければならないこともあった。給食センターの記録によると、給食の残食率

表1 校務運営委員会の報告

<ul style="list-style-type: none"> <li>・けんかやトラブルの多さ</li> <li>・教師による指示が通らない(授業が成り立たない)</li> <li>・給食指導・掃除指導のときにトラブルが頻繁に発生</li> <li>・特定の子へのいやがらせによる不登校</li> <li>・特定の子の教師への反発</li> <li>・職員室に助けを求めるインターホンが毎日鳴る(6月)</li> <li>・教師5人係で対応した学級もあった</li> <li>・学校の電話代(トラブルの報告による)が上限</li> <li>・給食の残食率は、6月が最も多く8.3%(町平均3.6%)</li> </ul> <p>※平田(2019)で、子供の偏食傾向と学校生活満足度に相関があることが示されている。</p>
--

は、6月が最も多く8.3%(町平均3.6%)であった。このことは、平田(2019)が、子供の偏食傾向と学校生活満足度に相関があることを示しており、残食量の多さが、子供の学校不適応の状態と関係していると考ええる。生徒指導上の諸課題に関する実態調査(令和元年度月例報告)では、30日以上欠席の子供が15名おり、児童全体の7.3%にあたる。この15名のうち、児童間トラブルが原因で不登校状態になっている子供は約半数であった。

このような中、校務運営委員会では、児童間ト

ラブルの多さや、いじめの問題の多発、授業不成立の状況が増えていることなどから、昨年度の学校の状態を「荒れ」と位置づけた。そして、この「荒れ」た状況を立て直す取組を進めていくことを再確認し、まずは子供達の現状を把握するために報告者が中心となってアセスメントを行った。

子供達はなぜこのように荒れるのか、担任にインタビュー調査をしたところ、ほとんどの教師が子供達の落ち着きのなさを指摘した。前年度の全国学力学習状況調査の質問紙調査の「自分にはよいところがありますか。」という問いに対し、「ある」と答えた児童は 13%であり、県 42%、全国 41%に比べて低い数値が出ている。また「学校のきまりを守っていますか」という問いに対し、「守っている」と答えた児童は 26%であり、県 41%、全国 43%に比べて低い値を示している。このように本校児童の「荒れ」の背景には、自己肯定感や規範意識の低さも起因しているのではないかと考える。

そこで、このような荒れた状況の子供たちを「安定」した状態へと向かわせる教育活動のあり方を究明し、在籍校の教育課題の解決に貢献するとともに、昨今、問題になっている「学校・学級崩壊」の改善にも役立てていきたいと考えた。

## イ 社会の要請から

平成 30 年度「児童生徒問題行動調査：文部科学省」によれば、暴力行為が学校の管理下で発生した学校数は 12,417 校（前年度 11,250 校）、全学校数に占める割合は 35.0%（前年度 31.6%）であった。また、いじめを認知した学校数は 30,049 校（前年度 27,822 校）、全学校数に占める割合は 80.8%（前年度 74.4%）であった。暴力行為・いじめの認知件数いずれも増加していることから、在籍校のみならず、全国的にも児童生徒が落ち着いて学校生活を送ることができるような教育活動の充実が求められていると考える。

## （2）研究主題・副主題の意味

主題に示した「すべての子供たちの学校適応を促進する」とは、在籍するすべての子供たちが、学習面や心理・社会面、進路面、健康面の課題が改善され安定した状態で学校生活を送ることができるようにするということである。

副題に示した「子供に任せる活動を取り入れた学級経営」とは、学級活動(1)（以下、学活(1)）の内容である話し合い活動において、問題発見から話し合い、実践、振り返りの各過程を可能な限り子供達の自発的・自治的活動になるようにすることである。狩野・田崎（1990）は、学級のいろいろ

な問題を学級の児童・生徒自らの力で解決できるように取り組ませることによって学級の自己教育力が高められ良い学級が作られることや、教師が児童・生徒と共に良い学級を形成するには、特別活動（学級活動も含む）の活用がひとつのカギとなると述べている。

在籍校のように厳しい実態の子供たちだからこそ、教師が信頼し、任せ、認めるという教育観が重要になってくると考える。

## （3）研究の目的

本研究では、「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を中心とした学級経営を全職員で共通に行えば、学校の「荒れ」が「安定」へ向かい、在籍校の子供たちの学校適応が促進されるであろうとの見通しを立て実践し、その効果を検証する。まず予備研究では、「教師の指導すべきことを揃える取組」で基盤づくりを行い、研究Ⅰでは「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を試行的に行う。次に研究Ⅱでは「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を 2・3・5 年生で実施する。

## 2 予備研究

### （1）目的

予備研究では、「教師の指導すべきことを揃える取組」について効果検証を行う。

### （2）研究方法

期間 201X 年 8 月～201X+1 年 12 月

対象 在籍校全学年児童（195 名）

#### 実施内容

「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を中心とした学級経営を行うには、それ以前に、子供たちが規律ある正しい生活をできるようにするという基盤ができていなければならない。荒れた学校を建て直した脇田（2014）の研究では、特別活動の中核に据えた学校経営を行う際に、基盤作りとして「教師の指導すべきことを揃える取組」を行っている。これを参考に、予備研究として以下の内容を（表 1）全教職員で確認し実施した。

### （3）測定内容と測定方法

- ・給食残食率調査（町給食センター）
- ・担任や報告者による子供達の観察
- ・担任外教師（管理職や生徒指導担当）による観察結果

### （4）実践の具体的内容

まず、校内研修の時間を活用して、「教師の指導すべきことを揃える取組」について、どの内容を全職員で共有化して徹底するかを決定し整理した。

表2 全教師が共通して指導した内容（川崎東小）

- ・人権的な問題には毅然として指導する。
- ・時間→チャイムと同時に授業開始・終了の徹底、教師も時間を必ず守る
- ・整頓→棚の上に何も置かない  
机をおくところに全員で印を打つ。
- ・給食→① 当番の「ならんでください」の指示のもと、着替えて、廊下にならんで、そろったら出発。  
② 給食室に入るとき（〇年〇組入ります）、もらって教室に帰る。その間、教室の子供たちは、机を班ごとにつくり、ふきんでふかせる。終わったらみんなは座って待つ。  
③ 配膳をとりに行く。教室に座って待つ。
- ・そうじ→黙動そうじを全校で。
  - ① 休み時間の終了の合図にオルゴール
  - ② 全員掃除区域へ掃除道具を持って行き、座る。
  - ③ 「黙想（20秒）→黙想やめ→起立→気をつけ→礼
  - ④ 黙動中は、先生も黙ってそうじする。
  - ⑤ オルゴールが流れたら教室の後ろに座る。「起立→気をつけ→礼」
- ・全校朝会→全員並んで静かに、体育館へ。
  - ① 8時15分になるとろうかに静かに並びだまって体育館へ行く。
  - ② 起立→気をつけ→礼→「おはようございます。」（礼1・2・3）
  - ③ 校長先生のお話を聞く。「今日は〇〇を頑張りましたよ」
  - ④ 起立→一年生から教室へ戻る。
- ・言葉遣い→教師が見本となる言葉遣いをする
- ・指導と評価の一体化→指導したら評価（ほめる）

具体的な指導内容は表2の通りである。推進組織として、校務運営のための中心組織である校務運営委員会を中心とした体制作りを行った。また、2学期の始業式の日校長と教務主任が子供達に取組の内容を伝え、その後各学級で担任が子供達に取組の説明を行った。それ以降は、生徒指導担当教員が中心となって、月に1度、生徒指導週間を設け、表1の内容の中から重点目標を決め徹底をした。令和2年度10月の生徒指導担当の調査によれば「黙動そうじを徹底できているか」という評価項目に対して、教師の自己評価は、5件法で平均4.1ポイントであり、多くの教員が取組みを徹底していたことが分かる。また、職員会議や終礼の時間に教務主任が担任に取組の呼びかけを行い、校内放送や表彰、学校便りを通して子供達の頑張りを、校長や教務主任がチェック（評価）と見直しを行いながら推進した。

### （5）結果と考察

「教師が指導すべきことを揃える取組」を行った結果、「荒れ」た学校が落ち着きを見せてきた。管理職や担任、生徒指導委員会報告によると、学校全体が静けさを取り戻しただけでなく、授業が成立しないなどの学級はほぼ見られなくなっている。令和元年6月に8.3%と最も高かった給食残食率は、令和2年度11月には0.6%と非常に低い値を示している。（図1）

このような効果が見られるようになったのは、これまで各担任任せになっていた、基本的な生活習慣の形成や学習、生活への規範遵守に関する指導を、全職員が統一して行ったことで若年層教員

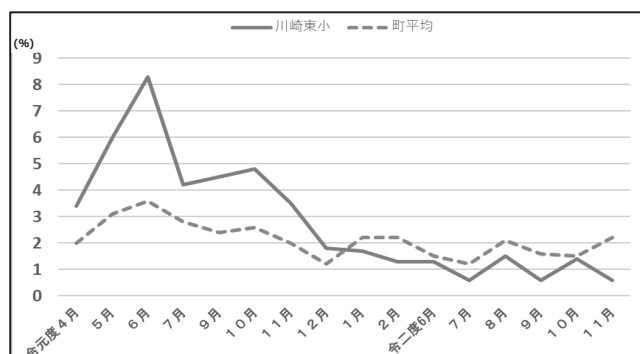


図1 川崎東小残食率（川崎町給食センター）

の指導力不足も補われ、全ての教員が同じように指導することができるようになり、そのことが、全ての子供たちに同じ内容で偏りなく指導されることとなり効果が見られたのではないかと考える。

しかし、教師による一方的な指導だけでは、子どもたちの学校適応を促進する学級経営は実現できない。実際に担任からは、「授業は成立するようになったが、子供同士の関係のこじれは依然として変わっていない」という報告もあった。7月22日生徒指導委員会報告によれば、在籍校では、教師が厳しく指導して子供を押さえつけようとしてしまい、かえって子供の反発が強くなり学級崩壊に至ったケースも報告された。太田（2001）は、教師による管理が強すぎる学級では、学級崩壊が起きやすいことを指摘している。このことから、学級経営の中心に「子供に任せる活動」を位置付け運用していくことは、学校適応を促進していくうえで重要であると考ええる。小学校学習指導要領（平成29年告示）に示された「自発的・自治的活動を中心とした学級経営の充実」がまさにこのことを示していると考ええる。在籍校のように学校不適応が見られた学校では、教師が子供を信じ、任せ、認めるという温かい指導観が重要になると考える。

## 3 研究I

### （1）目的

「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を行うモデル学級を設定して実践し、学校適応促進の効果を検証する。

### （2）研究方法

①期間 201X年9月～201X年3月

②対象 在籍校5年M組児童（21名）

介入学級は、学級が荒れ、教師の指導を聞かなかったり人間関係上のトラブルが多く見られたりしたことや、若年教員（担任経験1年目の講師）



が担任する学級であることなどから管理職との検討の上介入することに決定した。

### ③実施内容

- ・学活(1)における話し合い活動、学級集会活動の充実(図2の流れに沿った、報告者によるコンサルテーション)

### ④測定内容と測定方法

- ・学校環境適応感尺度 ASSESS(栗原・井上, 2010)
- ・各活動後の子供の振り返り
- ・担任や担任外教師(管理職や生徒指導担当)による子供たちの観察報告

### ⑤推進体制について

学活(1)における自発的、自治的活動である話し合い活動を中心に報告者が授業を行ったり、若年層教員に報告者がコンサルテーションを行ったりしながら推進した。

### (3)実践の具体的内容

令和元年10月17日(木) 5限

議題:「ハロウィンパーティーをしよう」

提案理由:これまで楽しいことがなかったので、みんなで楽しいハロウィンパーティーをしたいから。

話し合うこと:①何のゲームをするか  
②ゲームの工夫について

役割:司会:副司会・ノート記録・黒板記録は、すべて子供

### ①計画委員会立ち上げまでの経過

介入学級は、管理職との検討の上5年M組に入った。5年M組の担任は、1年目の若年教師である。1学期後半には、担任の指導を聞かず、授業中に勝手に私語をしたり、離席をしたりする児童が増え、特に6月には担任外教師が複数補助に欠かせなければならない状況があった。(7月22日生徒指導委員会報告より)更に、担任はクラスのリーダー的存在の児童Aからの反発があり、指導に悩んでいることを同生徒指導委員会へ報告していた。報告者は、校長からの要望もあり、日頃から担任の相談に乗っていた。2学期に入ってから、予備研究の取組の成果もあり、学級が1学期よりも落ち着いた状況が出てきたという報告が増えてきた。(担任の話・9月18日生徒指導委員会報告より)そこで、報告者から担任に、学活(1)の授業の提案を行った。担任は、これまでの教育相談の状況から、複数の子供達が「クラスに楽しいことがない。楽しいことを何かしてみたい。」という要求を話していると述べた。そこで、報告者は担任に、これを議題化して学級会を試みるように担任から子供に働きかけてみたら

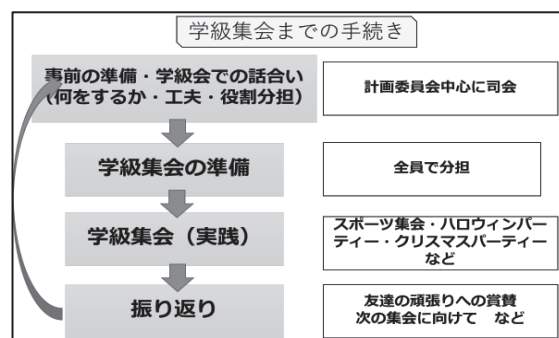


図2 特活解説書 P45 に示されている学習過程を参考に報告者がまとめた学習過程

どうかと助言をした。担任は、朝の会で子供に学級会の提案を行い、計画委員会を設置することにした。

### ②事前の活動

事前の指導の段階では、計画委員会と担任・報告者で、議題・提案理由・話し合いのめあて・話し合いことを決めた。また、配時、話し合いの練習(シミュレーションをしながらの話し合い・板書)などを、昼休みの時間を使って行った。

担任に反発していたリーダー格の児童Aは、積極的に司会の役割を希望した。学級会本番までに、担任や報告者に積極的に質問をしながら、全体をリードする姿が見られた。

議題については、学級会の前々日の帰りの会で計画委員会を中心に提案し決定した。また、事前に学級活動ノートに各自の考えを書き込んでもらった。

### ③学級会での話し合い

話し合いの進め方は、司会メモに添って司会・副司会が進行をした。考えてきた意見を発表し、それらについて賛成意見や反対意見を出しながら、よりよい意見に決定するという学級会の基本的な流れに基づいて話し合いを進めた。特に、「〇〇さんの意見もいいと思いますが、△△の意見の方が自分はいいと思います」のような、相手に配慮をした反対意見の述べ方をする児童が多く見られた。話し合いは喧嘩なく進んだ。この学級会では次のことが決まった。話し合うこと①では、「お化け屋敷をする」こと、②では、「お化け役をつくる」「体育館で行う」「盛り上がる音楽を流す」「お化け屋敷はチームを作りチームごとに周る」「控室をつくりそこで待つ」であった。

### ④遊びの実践

役割分担は、朝の会の時間を使って行い、全員が一人最低一役を担った。役割分担や、会の準備では、児童Aが中心となりクラス全体をまとめようとする行動が多く見られた。担任は、そのよう

な行動が見られたときや、帰りの会での先生の話の場面などで、児童Aの頑張りをできるだけ評価した。児童Aは、周りの友達と協力しながら、学級集会当日まで積極的に準備をした。学級集会は、とても盛り上がった。また、パーティー後の振り返りでは、「集会が楽しかった」と全員が挙手していた。また、議題ボックスには次も楽しい集会をしたいという議題案が数多く入った。これをもとに次の計画委員会が学級会を運営した。

#### (4) 結果と考察

##### ①結果

##### ア 担任・担任外による観察から

1学期と比べると、学級全体が落ち着いてきており、授業中の離席や私語が減ってきたことからそのように感じていると担任は話していた。また、指示が通るようになってきたという話もあった。特に児童Aについては、これまで担任と意見がぶつかり合う場面があったが、そのようにならなくなったと担任は感じているようであった。また、このような学級の落ち着きと児童Aの変化は、この学級に関わっていた担任外の教師や、外国語の専科の教師からも同様の報告があった。以前は、児童Aを中心に授業中の離席や私語が目立ち、授業を行う困難さがあったが、2学期の終わりにはそれがほとんどなくなった。(12月24日生徒指導委員会報告より) また、児童Aのわがままに、他の児童が同調する場面も見られたが、それもなくなくなって落ち着いてきたという報告であった。

##### イ 学級集会活動実践後の振り返りの発言から

これは、実践後の振り返りの中での子供の発言であるが、みんなで話し合っ、実践できたことへの満足感がうかがえる。また、学級会を進めてくれた計画委員会への感謝の気持ちを伝える発言も見られた。

C1: 集会は楽しかったです。

C2: みんな一丸となつていい学級集会だと思いました。

C3: 計画委員会の人が頑張っていたのが良かったと思います。

##### ウ 学校環境適応感尺度から

第1回目は9月に、2回目は12月に検査を行い結果を比較した。学級全体では、数値的に大きな変容は見られなかった。(図3) 個別に見た児童Aに関しては、第1回目の友人サポートが43だったのに対し、2回目は83と大きな伸びが見られた。(図4)

##### ②考察

学級が落ち着いてきたことや、児童Aが担任の

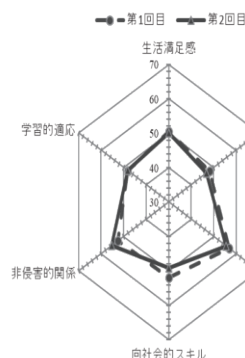


図3 学級全体の ASSESS

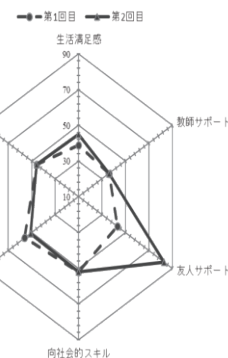


図4 児童Aの ASSESS

指導を受け入れるようになったのは、学活(1)の取組を通して、「楽しい活動をしたい」と思っていた児童の要求が満たされたことや、それを満たしてくれた担任に対しての信頼の向上があったものと考えられる。また、子供達に計画委員会の役割を担ったり、学級集会活動の実現に向けて頑張ったりして積極的に活動する児童Aを担任がほめたことで、児童Aと担任との関係が改善し、担任の話も聞くように変容したものと考えられる。また、5年M組のアセスの結果は1学期の結果とほぼ同じであるが、1学期よりも悪化していないという点では評価できると考える。また、児童Aの友人サポートが上昇したように、子供同士の関係改善の効果も見られる

## 4 研究Ⅱ

### (1)目的

学活(1)を中心とした「子供に任せる活動」を全校的に実施するために、発達の段階に応じた学級会のコンサルテーションと学校適応促進の効果を検証する。

### (2)研究方法

①期間 201X+1年4月～201X+1年12月

②対象 在籍校2・3・5年児童(100名)

介入学級は、管理職と検討の上2・3・5年に入った。これらの学級は昨年度学級が「荒れ」、授業が成立せず人間関係上のトラブルが多く見られたことや、若年教員が担任(2・3年目の教員)する学級であったことなどから介入することに決定した。

### ③実施内容

- ・特別活動全体計画と年間指導計画の作成
- ・学活(1)における話し合い活動、学級集会活動の充実(報告者によるコンサルテーション)
- ・担任が活用できる学級活動デジタルコンテンツ

の活用（脇田ら，2020）

#### ④測定内容と測定方法

- ・学校環境適応感尺度 ASSESS（栗原・井上，2010）
- ・小学校生活に関する調査（長谷川・太田・白松・久保田，2013）
- ※上記の質問紙調査について，2年生は対象外
- ・学校給食残食量調査をもとにした学校生活満足度調査（平田，2019）
- ・担任や担任外教師（管理職や生徒指導担当）による子供たちの観察報告
- ・各活動後の子供の振り返り

#### ⑤研究Ⅱを行うための条件整備

##### ア 推進体制について

学活(1)の指導については，報告者が小学校学習指導要領解説特別活動編（平成29年告示）（以下，特活解説書）P45に示されている学習過程に沿って（図2），担任（若年層教員）にコンサルテーションを行いながら支援した。コンサルテーションの内容は，（秋山，2014）の学級集団形成モデルを参考に（表3），低学年は教師主導を基本としながら，中学年は教師に相談しながら徐々に自分たちでできるように，高学年は可能な限り自分たちで学級会に取り組めるようにした。

表3 3段階学級集団形成モデル（秋山，2014）

第1ステップ	教師主導期	教師が主導しながら、児童に望ましい集団活動を体験させる時期
第2ステップ	児童の自主的活動への移行期	児童の多くが集団活動になれ、自主的に活動を進めることができるようになる時期
第3ステップ	児童の自主的活動期	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取り組みを計画実践することができる時期

また，1学期は，学活(1)における自発的，自治的活動である話し合い活動を中心に報告者（特別活動主任補佐）が授業を行ったり若年層教員にコンサルテーションを行ったりしながら推進する。2学期からは，学級活動デジタルコンテンツを担当自ら活用しながら，担任が授業実践を行う。報告者は必要に応じて，担任に対し授業づくりのコンサルテーションを行う。

##### イ 特別活動全体計画と年間指導計画の作成

本年度は，昨年の研究Ⅰの成果を踏まえ，これをモデルとして全校展開できるように，特別活動主任を中心として，年度当初特別活動の全体計画・年間指導計画の提案を行った。報告者は，特別活動主任補佐の立場で，主任と連携しながら計画の立案に関わった。提案では，学活(1)の実践を通して，担任教師が，担当の学級の子供達の間関係性をより良くし，お互いの「よさ」や「頑張り」

を認め合えるようにするという点を重点に位置づけてもらった。

#### ウ 学級会のための環境づくり

4・5月に，子ども達が学級会を行う上で活用できる学級活動グッズ（司会進行表・黒板用マグネット等）を，報告者を中心に特別活動部で，全学級分整備を行った。

#### （3）研究の実際

##### ①発達の段階に応じたオリエンテーション

2・3・5年生は，昨年度学活(1)を子どもに任せる形で実施できていない学年・学級であった。オリエンテーションは，学活(1)の経験値と低学年・中学年・高学年の発達段階における指導の違いを考慮にいれながら担任と打ち合わせの上，報告者が学級活動オリエンテーション（表4）を行った。

- 1 学級活動の授業の目的
- 2 過去の実践例の紹介（写真・ビデオ・グッズ・報告者によるレクリエーションゲーム体験）
- 3 計画委員会の立ち上げ
  - 2・3年：教師が司会・黒板記録を行う→次第に子供へ
  - 5年：学級内を6人1チームの3～4グループに編成した計画委員会を組織し，子供が運営
- 4 第一回学級会計画委員会
  - 2・3年：教師がモデルを示しながら計画
  - 5年生：学級会計画カードに沿って子供が計画

表4 学級活動オリエンテーションの内容

尚，3年生では，これまでの学級会の経験が十分でなかったことから，低学年の段階と同じ方法で学級会を行い，慣れてきたら少しずつ役割を担当から子供へ委ねていくように，報告者が担任へコンサルテーションした。

##### ②事前の活動へのコンサルテーション

2・3年生では，司会・黒板記録を担当が担って主導で進められるように，学級会の基本的な進め方について報告者が担任へコンサルテーションを行った。また，教師が議題を作るのではなく，子供たちの思いや願いといった様々な要求を議題化することが大切であることを，コンサルテーションした。

5年生では，報告者が計画委員会の子供たちに直接指導する場面を担当に見せながら，計画委員会への指導や子供たちへの助言・整理・評価の仕方のコンサルテーションを行った。

##### ③学級会へのコンサルテーション

学級会へのコンサルテーションは次の通りである。2・3年生の学級会では，司会・黒板記録を担当が担当し，司会メモを活用しながら担任主導で進められるようにした。研究初期（最初の1・2回）では，ゲーム（遊び）の内容を決める学級



会を授業の前半（25分）で行い、授業の後半（20分）で決まったことをすぐ実践することで、「学級会は、自分たちで話し合ったことを実践できる楽しい時間である」と感じられるようにした。子供たちが慣れてきたら、学級会で話し合うことを増やし、全員で役割分担をして学級集会を実践するような形にした。5年生の学級会では、担任は司会進行を子供たちに任せ、司会メモを参考にしながら子供たちが行うようにした。研究初期（最初の1・2回）は、学級会で話し合うことを1つにしていたが、次第に子供たちが慣れてきたら、学級会で話し合うことを増やし、合意形成につながる話し合いができるようにした。

#### ④実践、振り返りへのコンサルテーション

2・3・5年生は、いずれも、学級集会のプログラムをもとに全員で役割分担して（司会進行・みんなの前で言葉を言う係・飾り付け・プログラム作成・プレゼント作成・賞状作成など）実践し振り返るまで、全て子ども達が中心となって進めるように、担任へコンサルテーションをした。活動後には、報告者は担任の質問を受けたり、必要な情報を担任に提供したりした。

#### （4）結果と考察

##### ①小学校生活に関する調査（長谷川ら，2013）（5件法）

3・5年生を対象に行なった小学校生活に関する調査（図5）により得られた結果について、t検定を行った。（表5）分析の結果から、3・5年生において「わたしの学級では、学校行事や学級の活動で、学級目標やめあてを意識している（学活の実践）」の数値が有意に上昇しており、計画的な「子供に任せる」学活(1)の実践の積み重ねが数値の結果から分かる。また、「学級が前にくらべて、よくなっていると感じる（学級のよさ）」についての項目に有意差は見られなかったが、6月の時点で4以上の高い値を示しており、その後、手立ての有効性が維持されて12月でも3年生が4.3（12月）、5年生が4.5（12月）とその効果は維持されているものとする。また、「わたしの学級では、こまっている子がいたら、おたがい助けあうことができる（助け合い）」の項目について、5年生の数値が有意に上昇していた。3年生以上に実践をした5年生では、学級活動の実践によって「荒れ」た学級が落ち着くだけでなく、子供たち同士お互いに支え合うことのできる友達づくりが促進していると考えられる。

5年生の、特別に配慮を要する児童（昨年トラブルが多く学級を飛び出していた）B児は初め学

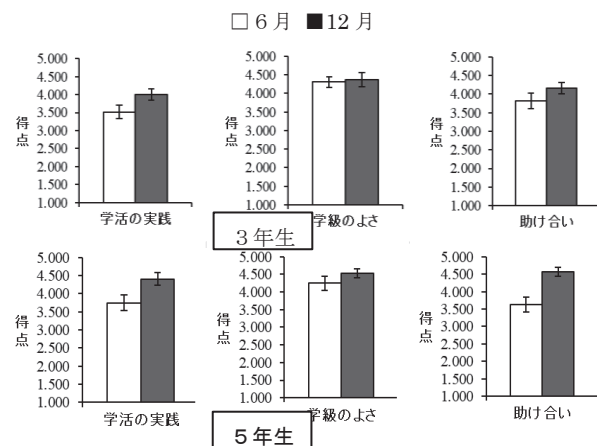


図5 「小学校生活に関する調査」結果

表5 各項目のt検定結果

項目	6月	12月	df	t検定 結果	
				t値	p値
学活の実践(3年)	3.515	4.000	32	3.20	0.003**
学級のよさ(3年)	4.303	4.364	32	.25	0.801
助け合い(3年)	3.818	4.152	32	1.93	.062+
学活の実践(5年)	3.750	4.406	31	3.14	0.004**
学級のよさ(5年)	4.250	4.531	31	1.25	0.222
助け合い(5年)	3.625	4.563	31	3.95	0.000**

+p<.10,\*\*p<.01

級会に参加したくないと言って参加しなかった。しかし、B児は「はじめの言葉」の担当に決まってから、練習を頑張り、本番でその役を果たした。みんなから拍手をもらってB児は嬉しそうにしていた。B児は楽しく集会に参加しそのことを振り返りにも書いていた。

学校環境適応感尺度 ASSESS の結果を見ると、1回目（6月）と2回目（12月）の調査結果の比較から、教師サポートが39から53、友人サポートが38から45、向社会的スキル32から41と上昇が見られた。（図6）B児について担任は「最初のお楽しみ会以降B児が少しずつ落ち着いてきているのがよく分かる。」と話していた。

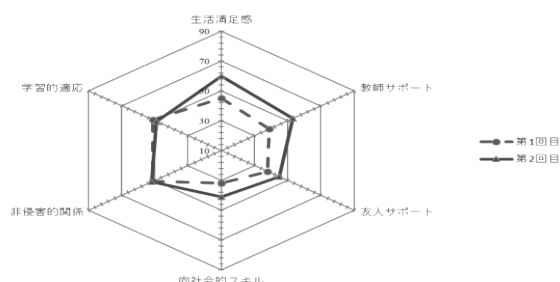


図6 B児のASSESSの結果

##### ②「小学校生活に関する調査（長谷川ら，2013）」の結果を裏付けるエピソード

##### ア 学級会・学級集会活動実践後の振り返りから（5年生）

D1:「成功して良かった。すごく楽しかった。」

D2:「もう一回やりたい」

D3:「楽しいお楽しみ会が出来て良かったです。」

D4:「絆が深まったと思います」

どの集会においても全員が肯定的な回答をしていた。集会は子どもたちにとって楽しかったことが分かる。

### イ 担任・担任外による観察から

どの学級も落ち着いた学校生活をおくることができていることが以下の報告から分かる。(表6)

表6 担任・担任外による観察報告(令和2年12月)

2年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級全体の落ち着き</li> <li>・喧嘩やトラブルの減少</li> <li>・学習意欲の向上</li> <li>・子供が毎日学校が楽しいと安心して いる(保護者の話)</li> </ul>
3年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業規律の向上</li> <li>・静かに話を聞く態度</li> <li>・子供の関係改善</li> </ul>
5年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級全体の落ち着き</li> <li>・喧嘩やトラブルの減少</li> <li>・みんなで遊ぶことが増えた</li> <li>・学習意欲の向上</li> <li>・喧嘩もなく安心している(保護者の話)</li> </ul>

## 5 総合考察

予備研究, 研究Ⅰ, Ⅱの実践に取り組んできた結果, どの学級でも昨年度起こった「荒れ」の状況は見られない。生徒指導上の諸課題に関する実態調査(月例報告)では, 児童間トラブルが原因で不登校状態になっていた子供達が, 令和2年度以降全員登校ができるようになってきている。給食残食率も大きく減少した。(図1)このような結果になったのは, 「子供に任せる活動」である学活(1)の話し合い活動と学級集会活動の取組を通して, 「楽しい活動をしたい」と思っていた児童の要求が満たされたことや, 子供達が計画委員会の役割を担ったり, 学級会で決まったことの実践に向けて役割を分担したりして積極的に活動する児童を担任がほめたことで, 担任に反発していた児童と担任との関係が改善し, 教師の指導を聞くようになったと考える。このことは, 宮坂(1968)が「子供達が人間らしく生きたいという願い(要求)を教師が受け入れることが教師に対する安心感と信頼につながる。」と述べていることと関連が深い。

また, 子供同士の関係改善の効果もみられた。このことは, ドイチュ(1949)が「集団内に共同の目標に向かって協力して達成しようという状態が生まれることで, 集団を構成している成員間に

相互の依存関係が生まれる。」ことを述べていることと関連が深い。また, ザンダー・A(1996)も「集団を構成している成員が同一の目標に向かって行動するとき, 多くの成員が仲間の行動を助けようとする。そのことが成員間の強調につながる。」と述べている。

研究の結果から, 自己肯定感や規範意識の低さから「荒れ」た状況が見られた在籍校の子供達への教育課題を解決するには, 次の二つの視点からの取組が有効であることが分かった。

一つは, 「教師全員が指導すべきことを揃える活動」という視点である。荒れた状態からの脱却という課題を共有し, 課題解決に向けた指導方法を共通理解し, 統一した指導を行うことによって規律ある生活の基盤を整えることができた。

二つ目は, 「子供に任せる活動を中心にした学級経営の充実」という視点である。学級生活の向上に関する問題を自分たちで見つけ, 問題解決のために話し合い, 友達と協力して実践する自発的・自治的活動を中心にした学級経営が, 一人一人の自己肯定感や規範意識を高めたと考える。

今後は, 集団の質を向上させるために学級内の人間関係から生じる問題に気づき, 解決のために話し合い, 協力して実践する子供達を育成していきたい。

### 主な引用・参考文献

- 平田裕美 2019「中学生・高校生の偏食傾向とストレスマネジメント, 学校生活満足度との関連」日本学校心学会第21回報告
- 長谷川祐介・太田佳光・白松賢・久保田真功(2013)「小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果」『日本特別活動学会紀要』第21号抜粋
- 狩野素朗・田崎敏昭(1990)『学級集団理解の社会心理学』ナカニシヤ出版 p. 160-161
- 宮坂哲文(1968)『宮坂哲文著作集Ⅰ』第1巻, p. 106
- 脇田哲郎(2013)「特別活動を核とした学校経営」佐々木正昭編著『入門特別活動』学事出版株式会社 p. 143
- ザンダー・A(1996)黒川正流ほか訳『集団を活かす-グループ・ダイナミックスの実践-』北大路書房 p. 93

### 謝辞

本研究に際し, 機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び筑豊教育事務所, 川崎町教育委員会, また, 在籍校や協力校の校長先生をはじめ, ご協力していただいた全ての先生方に, 心より感謝申し上げます。